

多芸輪中における新田集落の成立と消滅

— 輪頂部の大跡・大跡新田をめぐって —

西脇 健治郎

はじめに

たびたびの水害で、輪中は多くの人々の関心を集めている。輪中の問題は、その意味で全国的なテーマといえる。輪中の問題の本質にふれる場合、そこに起った新田集落の成立と消滅の経緯を明らかにすることが、早や道であり、それが輪中の地域性やそこに潜んでいる先人の生活の知恵を掘り起す大切なよすがともなる。

幸に、そこに生れて生きる私の六十年の体験と現地の聴取りに取材して、歴史地理学的な学びの方向づけを試みたい。

一、西濃の輪中景観と多芸（たぎ）輪中の地域性

(1) 輪中とよぶ治水共同体

安藤満寿男編著「輪中—その展開と構造」⁽¹⁾には、輪中とは「低湿地に存在する集落と農地を包含する囲堤をもち、水防組織体を作つて、外水および内水を統制する治水共同体、またはその存在する範囲」であるといひ、さらに分析して①囲堤を持っていること、②集落と農地を包含していること、③水防組合を組織して水の統制をしていることを特相として指摘している。

木曾三川の下流域には、一〇〇に余るこのような輪中名が史書に

散見する⁽²⁾。それらが文明の進歩につれて、統合・再編され、いま四〇ほどが生き生きと動いている。

ところが、「輪中の水」に対応する住民の生き方は、十把一からげに単純化して論じても意義がうすい。村には独特の地理性があり歴史性があるので、それに順応し、それを発展させて、住民福祉を実現するほかに道はないからである。本稿のテーマとする大跡と大跡新田は、西濃でも異色の複合輪中である多芸（たぎ）輪中⁽³⁾の輪頂部をしめる。大跡集落は水田地盤高およそ二〜三メートル。牧田川・揖斐川が築いた自然堤防上に主部をおき、高田・今尾間の県道沿いに拡げている集落である。そこには、「水に生きる」細い暗い集団的人生行路を、六〇世帯二〇〇〇人に余る行列が、時代から時代へと歩みついで。まず多芸輪中の水の地域性を、十分に検討する必要が、そこから出てくる。

(2) 輪中の特性と住民の対応

西濃に輪中地形を造りあげた自然の営力は、あり余る雨水をそこに集中的に流し込む仕組みにまで完成した。したがって

(1) 長い間にその水が堆積したいまの土壌は、粘土性で肥沃ではあるが、透水性が悪いので、地域をますます低湿にする。

(2) 輪中内外の水の動きが、地域内の生産関係・生活関係を制約し、村々がつねに氾濫・冠水・湛水などの多様な危険にさらされている。「夏は枕を高くしては眠れない」とするゆえんである。その水害の多くは木曾三川上流地方の多雨性と広域防災ダムの不足に基づく。防水上、広域的地理関係からの考察が求められるのもそのためである。

(3) 輪中では、水の動きが細かな地形関係（地面の勾配・池沼の分布・川幅と川の屈曲・水路の密度）に動かされており、ことにその特殊な風土性に密着した生活の知恵が大切となる。

(4) 従って、水田には堀田や堀潰れが多かったし、河川を中心にした遊水地をもち、あし・まこも・柳などの茂る景観が目立った。そういう過剰の水と手を組むために、多くの排水機や揚水機が使われるし、居住景観に盛土の宅地や水屋型式の建物が多くなった。

(5) 輪中の人々は一般に、水害の要因としての雨量や河川水の動きには敏感である。しかし、地域の多湿性に対する対応は、まだまだ未熟としかいえない。この面から村の生活改善を方向づける必要に迫られていることには、割合に関心がうすい。

(3) 多芸（たぎ）輪中の構成と地域性
多芸輪中は、さまざまな小輪中を高次の立場から総合した輪中⁽⁴⁾であり、その面から全西濃輪中の縮図と見ることもできよう。一面、この輪中は顕著な自然的特性を持ち、それが住民生活に深く関係している。つぎに多芸輪中の構成を多面的に性格づけながら、その故にこそ、村の歴史に織り込まれた水に対応する生活の知恵を探ってみよう。

(1) 扇端型輪中：東に高い急斜面を見せる養老山地東麓沿いに、一連の低地が南北に走る。北西から南東に緩く傾いたサンミ皿の底を思わせるこの地形は、東高西低の濃尾平野の基盤が、この地に最大の沈下を見せたことによる。そこを南流する揖斐川に、西濃第一の暴れ川である牧田川や、大垣市域を貫く抗瀬川が合流し、養老山地から流れ出す小河川の土砂や、長良川・揖斐川の運ぶ大量の土砂が

混り合って、かすかな傾きをもつ堆積面（微扇状地）を造った。こうして木曾三川の中流部養老扇状地末端部にこの多芸輪中が構成された。

(2) 緩傾斜輪中：この牧田川や群小河川の造る堆積面が、次第に木曾三川の大三角洲平野に移行する氾濫原に、多くの自然堤防を繰り上げた。諸支流が互に後背湿地を囲った。平坦な微地形状に微高地と水路を編成した。かなりの傾斜をもつことがこの輪中の特色で、それが、いまのようないくつかの小輪中を複合する基盤を造りあげることになった。

(3) 内陸ゼロ以下輪中：内陸に位しながら、地盤高が海拔マイナス五〇センチの低窪地を⁽⁵⁾、南部にふくみ、全体の3分の1にも及んでいる。大正期に干拓された下池（しもしいけ）の跡（約二〇〇ヘクタール）である。いま四つの排水機に依存して乾田化されている。これが岐阜県最初の干拓水田である。

(4) 複合型輪中：本稿のテーマである大跡集落を乗せる自然堤防が、西方飯ノ木（はんのき）に伸びて、両村の北壁を固めたが、さらに南方一〇二キロの所に水除堤を築いて、その小輪中の中に二村がおさまった⁽⁷⁾。これが飯ノ木輪中で、いわゆる上郷輪中であった。この上郷の水を受けて湛水に苦しんだのが下郷輪中である。こうした耕作上の利害の調整をめざして、相隣地の飯ノ木・下笠・岩道・有尾・大場新田・釜ノ段・根古地・高柳の小輪中が複合したのが、多芸輪中である。

(5) 地下水型輪中：養老混合扇状地の末端には、地下水の湧泉（ガマ）が数多く、多芸輪中西境の大輪中堤に沿う農耕地の中に見られ

るが、湧水の冷温が稲作を制限している。一般に扇端部では、地下水の水位が高く、よく掘抜井戸に利用されるが、多芸輪中では、それらが生活用水に利用されている。しかし古くは、下郷での湛水を恐れて、株井戸の制⁸⁾ができていたが、排水機の導入で大正の頃から、その制限も消えた。いまでは、掘抜井戸は水量の調節が至便で、必要な所に必要な時に灌漑水を引けるので、広く利用されている。ことに大跡や有尾地区にその例が多い。

(6)山寄り型輪中：以上は地形や水理を中心に輪中を見たが、気候の面からも、その地域性を「山寄り型輪中」としてつかむことができよう。夏の多雨性と雷雨性がことに目立つからである。「小倉谷は雷の巢」といわれるように、気象通報に「山寄りでは」と言葉が添えられると、この輪中にも多様な関連がでてくる。三大河が掌の中に集まる形の西南濃では、どここの山寄りに降る雨でも残らずここに集まる可能性を含んでいる、揖斐川筋が一番低いので、そのあおりも必ず受ける。宝暦の三川分流工事も、この輪中の裾の部分で行われた。

(7)大型の輪中：木曾三川の中流部には、桑原・大垣・福東（ふくづか）・高須・多芸の大型輪中が集っている。いずれも岐阜県の米どころであり、面積も広いし生産も多い。災害もまた大きい。多芸輪中は伊勢湾台風で牧田川の堤防が欠壊し、二ヶ月も水没した。泥海は、わずかに自然堤防を思わせる大木の梢を、砂嘴のように水面に残しただけで、その巨大さを住民の実感に訴えた。

多芸輪中規約⁹⁾によれば、つぎの町村がその区域とされている。
(注意△Ⅱ一部の小字を除外 ○Ⅱ堤脚外を除外 記号なしⅡ全村

を含む)

養老部：高田△・押越・烏江・沢田△・桜井△・上方△・五日市・竜泉寺△・石畑△・口ヶ島・西岩道・岩道・大跡・飯ノ木・小倉△・鷲巢△・三郷・志津新田△・津屋△・志津△・根古地△・根古地新田△・大巻△・駒野新田△・釜段・大場・船付△・大野△・大場・下笠・上之郷・栗笠△・橋爪△・乙坂△・多岐△
海津郡：城山村戸田・高須町福岡

(4)多芸輪中——もう一つの海

(1)伊勢湾を大垣まで揚げた泥の海：明治二九年の広域にわたる輪中水害では、大垣―桑名間が一大泥海と化し、伊勢湾がにわか大垣まで拡った。多芸輪中輪頂部でも、すべての民家がその海底に沈んだ。大跡では、九月―二月を食べつなく米俵を隣村飯ノ木の源氏橋付近の輪中本堤に川舟で移したが、せっかくの米俵が多くは雨漏りのままにさらされた。地続きの明徳集落の神社境内が緊急の牛の避難場所となった。村人は本堤に小屋掛けして水の引くのを待った。履災した村には、つきもののように赤痢が拡がった。

(2)伊勢湾台風が造ったもう一つの海：昭和三四年七月一五日揖斐川・牧田川が上流地域の集中豪雨をうけて、空前の大増水をした。牧田川を合流部から逆流した揖斐川の水が、水位を異常に高め、ついに多芸輪中の輪中堤を根古地（ねこじ）地内で約二〇〇メートルにわたって欠壊した。十数戸の民家を流失し、村人の生活を強くゆさぶった。どの排水機も完全に水没して機能を失った。牧田川から養老山麓までを数時間で、一つの泥海と化した。

大跡でも、民家の多くは床上一・五メートルまでも水没し、約一

週間、全戸が高田中学に集団避難した。この時も牧田川沿いの村々に赤痢が拡った。直ちに破堤個所の復旧工事を続行。避難小屋の並ぶ牧田川沿いの輪中本堤をダンプが夜を日について走った。四〇日ほどで八〇％を築堤した九月二十七日、再び上流地域に集中豪雨が見舞い、下流で前と同じ所を破ってまた湛水が続けた。前回より湛水面は約一メートルは低かったが、長期の水没で稲作は全滅した。最も低い旧下地干拓地では、湛水三ヶ月に及んだ。まさに六三年目の惨害であった。「排水機が輪中水害の後を絶った。」といわれながら、やはり人間力では自然の大災害を根こそぎ振り払うことは決してできないことを自然が教えた。川の増水時が天気回復より遅れたので、快晴の昼間を村中がリヤカーで、前と同じ高田中学に避難した。その後、脅え切った住民は、三日も雨が続きと、もう「水がたつけ」（輪中で水害の避難体制をとることをいう）をする。以来数年に一度はその必要があった。その都度中二階はすべての家財道具の避難倉庫となるし、重くて大切なものは高屋敷に一時預けをした。伊勢湾台風では、高屋敷の家は仏壇の集積所になったが、今ではほとんどの家に仏壇を中二階に引き上げる装置が普及したので、代って、農業機械と自動車が所狭しと高屋敷を占領する。水屋も少く、公式な助命壇はなかったようだが、自然堤防上に高屋敷が多かったためであろう。

(3) 災をかわずもう一つの海：扇状地から三角洲に移る河床勾配の屈折部を占める多芸輪中は、恐らく水害の宿命を脱し切る訳にはいくまい。その宿命が、喉元を過ぎて暑さを忘れない心のゆとりを、すべての住民につねに呼びかけている。流域が広く上流部に全国有

数の集中豪雨地域をもつ木曾三川。荒れ川の相貌をまざまざとさらす牧田川。これらが荒れ狂うと、海から遠い多芸輪中も、たちまち泥海に化する。命の綱の排水機は止まる。飲み水も電流もとだえる。電話は止まり自動車も使えない。人命の避難さえ危くなる。

この宿命をほらむ「一つの海」も、日頃は水に恵まれた岐阜県の米どころ、日本の中央部をしめる中部圏のかなめどころである。春ならば若草の海、夏なれば稲田の海、秋なれば稲穂の海、冬なれば沃土の海、さまざまな望みをもって、これらもう一つの海に浮かぶ六五〇〇世帯。その人生の船旅に平安と生き甲斐を支えるものは、「水のことは水に聞く、調和の姿勢」ではなからうか。静かなるもう一つの海多芸輪中には、村と村が結びつき、水と人が輪中としての平衡と調和を造り上げ、先人からの知恵も引きつがれている。だからこそ万物を没した泥海の中でも、スムーズに助け合える。つながりを破るのも水なら、築き上げるのもまた水である。水こそは輪中の宝である。まさに世界に開く海の時代。輪中の海の静かなる舞台にも、災を転じて利水に花開く文明の光に、住民二万五千の希望を托したい。

二、輪頂部大跡の農業五〇年史

このような「もう一つの海」多芸輪中においても、水と人との戦いは、生活のあらゆる面に及ぶが、水と米つくりの関係は、つねにその中心的な課題となった。平均状態を語りやすい大跡について見よう。

(1) 明治期

明治初期には、この輪中も、その輪頂部も、ほとんどが湿田であり、魚鱗状の小さな田が並び、細い畦が曲りくねった。多くの農作業が川舟を足とした。明治後期には多芸輪中に排水機が導入されて、二毛作が目立ち始めた。

(2) 大正期

大正期には、上田(かみた)には水田裏作に麦類、菜種、馬鈴薯などが作られたが、土くれを高く積み上げた「くねた」が多く、田中啓爾のいう櫛齒式耕作が支配的となったが、デルタ輪中に見るほどの高いものではなく、うねがもっと広く、高さはやや低く目であった。

水との戦いに疲れ切ったこれら農村から、糸姫や、女中が送り出された。換金農業への模索が拡がり、クワとコウリヤナギと種取りレンゲが相次いで導入された。畑が麦からクワに変わり、堤外地のクワにも頼って、養蚕が行われた。下田(しもた)の裏作に排水機の威力が出て、「半作」などという減収はほとんどなくなった。地主・自作・小作の階層化が進んだ。

(3) 戦前と戦後

昭和中期には、戦前・戦後の対比が顕著に現われ、米の統制が定着した。土地改良・品種研究・肥料改善・農業普及・農業機械化・施設農業の導入などで、農業景観を一変した。農地改革による農民の勤労意欲が、増産と省力に面的な成果をあげた。ついに一九七〇年には、米作の減反による生産調整が始った。

この経過は、全国一般の大きな歩みではあったが、経済的にこれを進めえたのは、輪中地形の低平性に負うところが大きかった。事

実、この村では、戦争・供出・農地改革・伊勢湾台風による水没・産業道路の建設・減反政策が進歩の大きな節目となり、輪中特有の「水との対応」が、その厳しい制約となった。

こうした農村の動向や未来を展望する場合、輪中では最も遅れて、水の風土に成立しながら、最も早く消滅の運命をたどった新田集落の短命に目を注ぐことが、有効な必然的思考であろう。多芸輪中における大跡新田がその好例であるが、この新田がいかにかに成立し、いかに消滅したかを、詳しく当時の記録にこれを求めることは、おそらく困難であろう。歴史地理学的手法で、当時を復元するよりほか方法がないが、その探究は今日にも生きる輪中の知恵を、数多く掘り起すに違いない。

三、多芸輪中輪頂部における大跡新田の開発と消滅

(1) あらましの経緯

このような養老山地東麓に、緩く展開する牧田川扇状地の末端部(多芸輪中輪頂部)に、大跡集落がいつごろどうして開発されたかは明らかではないが、人口増加につれて開発が北から南に拡がる大勢の中で、牧田川筋の自然堤防をよりどころとしたものと思われるが、大跡の地名が古い文書に現れるのは、天正年間(一五七三—一五九一)のこととされている。

この大跡集落の南方約二キロにあたる水除堤外の遊水地域に、大跡新田(新田集落)が成立したのは、西紀一七〇〇年前後であることが、当時大跡村庄屋から小倉村(養老扇状地末端部にある)の開発人にあてた「開発は差支えなく、決して異議をとない」とす

大跡新田開発証文

一札之事

(貞信)

一今度 小笠原土佐守様御所替ニ付、其方え御引得之新田高、
本田之高之内起返リニ罷成申段、御公儀様へ書上申候、然
共先年新田開発以來、本田より少もかまひ無御座上は、自今
以後如何様之儀御座候共、少もかまひ無御座候、於後々々御
代官替り其外御給人様方へ相替り申候共、子々孫々ニ至迄人
用懸ケ申儀へ不及申ニ、其外何ニても少も本田よりかまひ無
御座候、縦御公儀様より被仰付候儀共ニ本田へ申来り候共、
本田よりハかまひ無之段御断申上、其方さばきニ罷成候様可
仕候、為後日仍如件

元祿四年

未八月

小倉村

権四郎殿

七兵衛殿

大跡村庄屋

彦右衛門

同断 源右衛門

○小倉 栗田嘉三氏所蔵(『養
老町史資料編』上巻による)

る右の開発証文によって推定される。

この大跡新田の開発が、大跡本村より少なくとも一〇〇年も遅れ
たのは、おそらく新田地域の地盤高が三〇〜五〇センチは低く、鷺
巣川などの遊水地域にあたり、水位の不安定さと低湿さから、将来
にわたる水害を乗り切れないとする見通しによるものであろう。

にもかかわらず往年小倉村の住民を、文字どおり命がけの開発に
ふみ切らせたのは、おそらく、畑作に頼るほかない扇状地村の米へ

の魅力であり、兩危地を間近かに求め得た地理性が、それを決定的
にしたものと考えられる。三〇〇年も経過した現在も、小倉や鷺巢
などの扇状地の村々から、大跡おき(大跡地内にある田)への出作
が多いことから見ても、それが裏書きされよう。

とにかくも、葦やまこもの密生する低湿な遊水地をわずかに十軒
以内の小集落で開発してから約二〇〇年を、さまざまの水の苦難と
戦った。生きる使命の貴さを語るものとして、興亡の村史にその名
をとどめた大跡新田もついに明治中期になって消滅の運命をたどっ
た。聴き取りによれば、度重なる水没、ことにある夏の深い湛水に
際し、養老扇状地にある近村小倉の一地主による厚意の救済を受け、
挙って小倉村の一角に居を移した。村人は「新田組が山に登った」
と聞き伝えを表現する。

水は水の論理によって低きに流れ、低きに溜った。農民は毎年の
ように冠水に泣き湛水に迷った。そして集落は消滅した。だが、昔
から大跡新田を護った水神「神明宮」は、今もそのまま新田組の人
人に祭られているし、もとの集落の跡地は、耕地整理して立派な水
田となり、新田組の人々にも自作されている。大跡新田の村名は消
えたが、くしくも扇状地の乏水性集落小倉に「新田組」ができ、分
家も増えて繁栄のあかしを手に入れることができた。そぞろに人の
世の栄枯盛衰と、永遠に変わらぬ人と水の関係を思わせるものがある。
しばしば水浸しに会う大跡新田の低湿地の生活では、それが人命に
かわわるとして、堤防上に小屋がけを敢行して、近村との出入りに
まで発展したこともある。それを内済にこぎつけた記録¹⁰⁾を見ても、
いまさらの如く遊水地域の水の冷厳さを思わせる。また、あと二〇

大跡新田明細帳

(表紙)

文化十二年

濃州多芸郡大跡新田指出明細書

亥四月

多芸郡

大跡新田

多芸郡

大跡新田

寛文八申年小笠原土佐守様御檢地
一高三百九石三斗六升

此反別三拾町九反三畝拾八歩

(略)

此 訳

田廿九町五反三歩

此高貳百九拾五石壹升

畑高貳町貳反六畝廿三歩

此高拾貳石六斗七升七合

一家数五軒

内 三軒

高持百姓
水呑百姓

一惣人数

貳拾老人

一寺無御座候

一神明宮老社

横老尺八寸
口老尺五寸

但御堤通建置申候

一御堤長五百間

(略)

一悪水落江

但長九百間程

一御堤内ニ中除長四百間程御座候

幅四間より八間迄

是ハ年々修復百姓役仕来り申候

一所々悪水落小江筋

但長千間
幅貳尺より五尺迄

一橋

老ヶ所

但貳間半
幅五尺

是ハ、掛替之儀は百姓役ニ仕来り申候

(略)

一小船 四艘

但長貳間半
巾老尺七寸

是ハ作場へ通イ候、船ニ所持仕候

(略)

多芸郡大跡新田

庄屋

文化十二年亥四月

友右衛門 印

百姓代

源次郎 印

笠松
御役所

(岐阜市大宮町 岐阜県立図書館所蔵)

年ほどで多芸輪中に動力排水機が実用化されて、農耕に新しい面を開いた事実と思ひ合わせると、人間の知恵や時の作用(機械力の導入)の大きさに驚かすにはおれない。

あえていえば、本村大跡も多芸輪中に排水機の導入がもう二〇年も遅れていたら、後継者を得られず衰亡への道をひた走ったかもしれない。

だが、この優れた機械力も、昭和三四年の伊勢湾台風による水没で、一台の例外もなく機能を失った。水に生きる最後の力は、時代と風土に適應する生活の知恵ではなからうか。

(2) 大跡新田の命を縮めたもの

大跡新田の短命は、遊水地帯における水の不定性であり、村人が自然の低湿に抵抗する手段を失ったことによるのはいうまでもないが、その背景はそれほど簡単なものではなからう。さらにいくつかの視点を追加すべきであろう。試みに若干の究明事項を提起してみ

よう。

(1) 漸移地帯：あたりは養老扇状地の末端部であり、多芸輪中の輪頂部に位するという二重の地形関係から、山家（やまが）と水場みずば）の漸移地帯の性格が濃い。そこに、いわば二足のわらじをはく式の出作関係を主因とする開発ではなかったかという疑問が残るのである。

(2) 集落規模：大跡新田の集落規模は、時代により多少の変遷はあるが、九軒く五軒とする記録が多い。¹³⁾「風にゆられたともしび」の感が胸に迫る。やはり村落は一定の規模を持ち、生産手段が継続されねば維持できない。いまの過疎の村にも通ずるものがある。

(3) 交通位置：交通を主として川舟に頼り切る姿勢にも問題があった。村落の生長には多様な交通手段のバランスが望まれるが、この場合、道路交通の弱さが指摘できる。同じ遊水地域東部に自然堤防上の構（かまえ）の堤外地を占めた八剣（やつるぎ）小字が、地盤高に大差がないのに、今に存続し得たのは、古くから輪中地域の主要道（関ヶ原―今尾）沿いに立地し、農業外の就業機会を持ち得た強みが考えられる。両者の対比からも、大跡新田消滅の経緯を推定し得よう。

(4) 外部的地理関係

つまり、集落を支える力は、外部的地理関係からもたらされることは、古今の通則であろう。第一、孤立するところには生命のおびえがある。第二、交通手段さえ良ければ距離を遠しとせず情報も集まるし、品物も広く動かせる。第三、時代の流れも、それなりの交通ルートによって、強く求めるところに集まる。大跡新田の場合も外部か

らの救済が大きな力となった。

いまの多芸輪中輪頂部の村人たちが、広域的な輪中地域を引継いで、よく水と調和し、人と調和し、近郊性を生かす繁栄や福祉を實現し、それを水浸しになって生きた古人に、感激をこめて語り得る日がくるのか、こないのであるか。おそらく近代性と近郊性への着実な転身が、その成否を決するであろう。

四、輪中農村の未来展望

一般に、輪中農業の歩みをみても、水と人の結びつきが、時代と共にますます重要さを加えるばかりである。

もともと輪中というのは、低湿地域の居住関係で、住民が自然の水とよく調和しながら、水を活かす仕組みにほかならない。

(一) 農業上の対応

従って、これからもつねに耕地を整備して、地盤を正しい水平面に保ち、灌漑排水を完全に制御できる体制をとることなしでは、せっかくの大型機械も、その能率を低めるばかりである。とくに傾斜輪中の輪頂部において、この関係が物をいう。

また、地面の一部が、ところどころ水から露出するような水田では、現代農業の切り札である農薬も、その効果を十分に現わすことができない。例えば、航空機で広域にわたる除草用農薬を散布しても、薬剤の効果は水が一定の深さを保たないと現れない。もちろん、灌漑水が流出する条件のなかでは、決して水草は枯死しない。

だから、多芸輪中のような傾斜型輪中では、畦畔の高さを数本ごとくに漸減し、次第に下流のデルタ部の低平型輪中に移行させる配慮

が必要となり、広域計画的な基盤整備が望まれよう。

また、イネの耐寒性品種の創出が、北海道の米作地域を北進させたように、輪中地域においても、一日でも長く冠水に耐えられる耐水性品種の創成が、どれほど望まれることか。

いま、岐阜県の自主流通米となっているハッシモが、栽培における耐水性と主食としての「うまさ」が認められて、若干の問題を含みながらも、長くこの地に定着した感があるのも、その一種の初象と見てよからう。

(2) 近郊化への対応

ゴットマンがいうように、メガロポリスの生長が、世界的な必然の勢とするならば、農業一途の地域思考では、輪中は文明に置き去りにされるほかなからう。第二次・第三次産業との共存姿勢の上こそ、人間の咲かせる美しい水辺の花がよく香るのである。

一般の都市地域では、居住地域の少しでも広いことを望むが、輪中地域では、1センチでも高いことが望まれるのは当然である。いままでは、輪中の村は防水の便利を求めたが、これからの近郊性土地利用では、防湿上の配慮を大きく加えることになる。

橋と道の近代化が輪中の堤防を上り下る自動車路を、どう地域に適応させるかにも、もう一つの課題がある。

引用文献

- (1) 安藤万寿男編著『輪中——その展開と構造』古今書院
- (2) 中沢弁次郎著『輪中聚落地誌』大衆書房
- (3) (1)と同じ
- (4) 同右一〜二頁 地図

(5) 地理調査所「伊勢湾台風報告書」

(6) (7) 地理調査所「土地条件図大垣」

(8) 『養老町史資料編下』一四五頁

(9) 同右 六七五頁

(10) 養老郡郷土誌編纂委員会『開けゆく養老』一四五頁

(11) 『養老町史資料編上』二六二頁

(12) 同右 八六頁

(13) 養老町史資料編各所に若井の記録あり

各挿入地図にもそれぞれ出所併記

その他主要参考書

養老郡教育会『養老郡志』

海津郡教育研究所『郷土海津』

岐阜県教育委員会「岐阜県輪中地区民俗資料報告書」

岐阜県「岐阜県政要覧」

長倉三郎『日本民俗——岐阜』第一法規

日本地誌研究所『地理学辞典』二宮書店

浅井得一『人間の地理学』玉川大学出版部

毎日新聞社「東海百年」

(I)
(II)
(III)